

IIAS「ゲーテの会」ブックレット  
(VOL. 01015)

未来社会はいかにあるべきか  
～ 人類の未来と幸福を考える ～

(思想・文学分野)

## 伝統思想に基づいた新しい哲学を

公益財団法人国際高等研究所  
<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト

本ブックレットは、2014年10月8日開催の第15回『満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」』の講演録を基に、公益財団法人国際高等研究所<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局が編集・制作したものである。

※本ブックレットの無断転載・転写を禁じます。ただし、個人としての利用の範囲内であれば、コピーしてご利用いただけます。

## 未来社会はいかにあるべきか ～ 人類の未来と幸福を考える ～

# 伝統思想に基づいた新しい哲学を

ハイデガー、ウィトゲンシュタイン、デリダなど、現代の哲学は過去の哲学を否定し、解体した。しかし、それに対して、どのような新しい思想を形成できたであろうか。今日、大学の哲学科はきわめて不評であるが、それももっともなところがある。しかし、さまざまな災害が続き、政治や経済の面でも混迷が続く現代こそ、本当の意味で時代を照らす哲学が必要ではないのか。そして、もはや西洋直輸入の流行を追うのではすまなくなった今こそ、伝統思想を振り返り、そこから何を生み出すことができるかを、しっかり考えていかなければならない。このような観点から、中世日本思想の「顕」と「冥」の概念に基づいて、私が提唱する新しい哲学について紹介し、その有効性を検討してみたい。

### 末木 文美士 (Fumihiko SUEKI)

1949 年甲府市生まれ。国際日本文化研究センター教授。  
東京大学名誉教授。

専門は、仏教学、日本思想史。

著書に、『日本仏教史』(新潮文庫)、『日本宗教史』(岩波新書)、  
『日本仏教入門』(角川叢書)、『哲学の現場』(トランスビュー)  
などがある。



## 目次

はじめに

### I なぜ今、哲学なのか

- (1) なぜ「哲学」について語るのか
- (2) 今日のこととしての「哲学」

### II 近代化とは何だったのか

- (1) 近代的人間観の反省
- (2) 哲学と神学の接近
- (3) 宗教への視座

### III 普遍主義の偏見とその克服

- (1) 自己統合性 (integrity) と他者親密性 (intimacy)
- (2) 他者親密性の見直し
  - ① 他者親密性の問題点
  - ② 他者・死者の問題

### IV 新しい哲学をいかに築くか

- (1) 一神教的世界観と、近代科学・哲学の世界観
- (2) 伝統的思想・宗教の世界観
- (3) 近代「国体」の精神構造
- (4) 戦後言論の誤り
- (5) 近世再考

2014年10月8日開催

第15回 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

テーマ：伝統思想に基づいた新しい哲学を

講演者：末木 文美士（国際日本文化研究センター教授、東京大学名誉教授）

（文中敬称略）

はじめに

高等研究所には3年ほど前にも伺ったことがあるが、その頃に比べて活動が盛んになっているようで嬉しく思う。そういうなかで、後ほど、今の東京一極集中の文化に対して、関西からどう発信できるかということをお話したいと思っている。

本日は「伝統思想に基づいた新しい哲学を」という大きなタイトルを掲げているが、元々私の専門は仏教学であり、いわゆる狭い意味での哲学ではないので、最近哲学について話をすると、そちらの専門家から「専門が違う」と言われる。それでも、敢えて今、なぜ哲学について話そうとするのかということから、どういう形で新しい哲学が作られるのか、伝統思想に基づくとはどういうことなのか等について考えながら、思想史を捉え直していきたい。

## Ⅰ なぜ今、哲学なのか

### （1）なぜ「哲学」について語るのか

「哲学」という言葉は明治時代にできたが、もとは西洋から持ち込まれたものである。初めの頃はいろいろあったが、今は「哲学」というと西洋由来、西洋中心のものになってしまった。しかし今、西洋中心主義が成り立たなくなりつつあり、西洋中心主義そのものが解体しようとしている。そのなかで、我々はそれに代わるものを持たなければならないが、果たして持ち得ているのか。持ち得ていないのではないか。したがって、それを模索していかなければならないというのがこれからの課題である。

これについては「思想」として語ることもできるが、敢えて「哲学」という言葉を使う。思想ではなく、「哲学」と言うのはなぜなのか、そこから話を始めたい。

### （2）今日のこととしての「哲学」

今、我々に必要とされているのは、総合的な世界観・人間観である。いろいろな学問が発展してきたが、それらはそれぞれの分野で個別に行われていて、ある分野が発展するとそこに国が予算を付けて、その分野だけが突出してしまい、バランスが悪くなってしまふ。一方で、倫理や宗教は、本来はもっとトータルなものとして考えられてもよいはずだが、これらもそれぞれの分野が閉鎖してしまつて全体化できない。

そういう意味で、もう一度ここで総合性を取り戻さなければならないと思う。その総合性とは、西洋史と近代を受け止めながら、もう一度そこに前近代の日本の伝統を生かしていくことである。それができなければ、地に足のついた新しい世界はつukれないのではないかと考えて「哲学」を挙げている。

ある意味で、近代哲学は西洋哲学を受け入れながら、そこに前近代の日本の伝統を加味していたが、もっと思い切って、アジアから日本へ向けて発展してきた前近代の思想も積極的に考えながら作っていく哲学があってもよいのではないか。そういう思いから「哲学」という言葉を使っている。もちろん「思想」という言葉も使うが、ひとまず「哲学」を新しく構築していくものとし、それに対して過去の思想を研究していく分野については思想史という言い方をしてもよいのではないかと思っている。この分野は丸山真男等によって大きく発展している。

## II 近代化とは何だったのか

### (1) 近代的人間観の反省

そういう意味では、我々は近代を反省しなければならない。近代的な人間観とはどういうものかと考えると、前近代から近代への進歩は一直線で描かれるが、前近代が非合理的、迷信的、幼似的な状態だったとすると、それを合理的、科学的で、大人の状態にしていくのが近代への進歩（啓蒙）であると言われる。

そういうなかで、例えば、宗教的なものも冷たく扱われるようになる。科学 vs 宗教という形で、宗教は前近代のものとして、近代になるとなくなっていく。あるいは唯物論的には、明治の国家体制下で言われた国民道徳論の立場も宗教を否定し、それを道徳で代えようとした。しかし、そういうものが成り立つわけではない。したがって、もう一度宗教的な問題も含めたトータルな形で、人間というものを考えなければならない。

この辺りで、宗教自体に対する見方も変えていく必要がある。かつて、宗教も近代化し、宗教改革によって近代の宗教として成り立ったのがプロテスタンティズムであると言われていた。前近代の宗教は迷信的、呪術的、儀礼的であり、カトリック的とされたが、それに対してプロテスタントの立場はそれらを信仰のみに純粋化していったというのである。

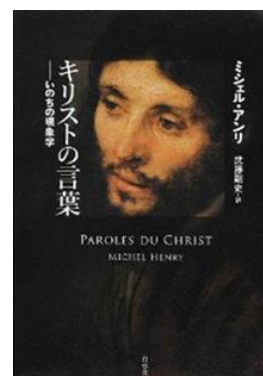
それに対して、仏教側も同じように近代化しなければならないということで、「プロテスタント仏教」という言葉が使われるように、仏教も近代化の方向に懸命に進んできたが、それを今、反省しなければならない状態になっている。

### (2) 哲学と神学の接近

例えば、ヨーロッパの哲学においても、かつては神学、宗教から離れることによって哲学は成り立ってきた。ところが、最近になって再び、哲学は神学に接近している。例えば、ユダヤ教系のレヴィナスなどが晩年に宗教的な問題に力を入れている。特に、フランスの現象

学などは急速に神学的な方向に転回しており、ミシェル・アンリやジャン＝リュック・マリオンなどがカトリック的な問題へと回帰している。そのような形で、ヨーロッパでも、近代化に対してもう一度カトリック的な宗教を哲学の中に統合していこうという動きが強く出てきている。

かつては合理化するに従って、イエス・キリストについても、宗教性を剥奪して「人間イエス」という見方が強くなった時期もあったが、最近の神学的な哲学の中では、哲学としてカトリック的なもの、例えば、受肉の問題や聖体拝領の問題を哲学的に解明しようという動きが出てきた。聖体拝領は、ミサのときに司祭の儀式によってパンと葡萄酒がキリストの肉と血に変わるというものだが、そのようなことは非合理で馬鹿げているというのが近代的な考え方であった。ところが、そういうことを実際にあり得ることとして、それをどう考えればよいのかということが真剣に考えられるようになった。それは仏教も同じで、合理化し、否定的に見られてしまった密教的な儀礼を、もう一度再評価しようという動きとも密接に関係している。



ミシェル・アンリ著  
『キリストの言葉』  
白水社 2012年

### (3) 宗教への視座

そういう意味で、宗教に対する見方は二つ考えられる。

一つは、近代化していくなかで社会に出て活動していくことを宗教のあり方とする。例えば、東日本大震災のときに僧侶が率先して被災者の仮設住宅に出かけて、移動喫茶店を開設し、悩みを聞く等の活動をしたが、それが基になって、今、東北大学に実践宗教学という講座が開設され、臨床宗教師の養成が始まっている。このような社会参加型が一つの見方である。

もう一つの見方として紹介したいのが、『大いなる沈黙へ』という映画である。これは社会参加型とは全く逆の、世間と完全に隔絶された南フランスの山奥の修道院が舞台である。修道院の中には社会と交流を持っているところもあるが、ここは一切世間との交流を禁じている。また、修道士は完全に個室で生活し、祈りの時間に集まる以外は一切話をしてはいけないという非常に厳しい戒律の下で神に奉仕する生活を今も行っている。この映画はまさしくその沈黙を3時間近くひたすら映したものだが、私はとても感銘を受けた。

このように、全く逆の二つの方向がある。近代は世俗化し、社会の下に一体化して、宗教も社会化していく方向で考えられていたが、それと逆の動きも重要ではないかと考えられているわけである。

## III 普遍主義の偏見とその克服

### (1) 自己統合性 (integrity) と他者親密性 (intimacy)

次に、これらのことを手掛かりとして、我々は伝統的な考え方をどのように見たらよいか

という問題を考えたい。

従来の哲学は、普遍的な真理を見つけ出すものと考えられていたが、今日では西洋中心主義の解体とともに普遍的な哲学自体が疑問視されている。そういうなかで、多様な世界観を創り上げていくことが、逆に可能になってきたように思う。

その手掛かりとして、トマス・カスリス (Thomas Kasulis) の『他者親密性か自己統合性か』 (*Intimacy or Integrity: Philosophy and Cultural Difference*, Univ of Hawaii Press, 2002) を紹介したい。カスリスは日本の哲学の研究者で、「禅の哲学」や神道を中心とした近代の哲学を専門に研究しているが、その長い哲学の研究から、「今までの西洋中心的人間観、特に近代的な人間観とは違う人間観がこの世の中にはあるのではないか。それは単に近代的な人間に移行しなければならないようなものではなく、別の人間観のあり方として可能ではないか」という考えを導き出し、提案した。それが「自己統合性(integrity)」と「他者親密性(intimacy)」で、Integrity は独立的や自律的という訳を当ててもよいが、自分というものがそれ自体として独立的に統合されているという考え方である。これは自分というものが自律的に確立していて、知性的・理性的で、自分の心を常に反省的に考えるところから、互いの公共的な場が築かれていくという人間観であり、西洋近代において典型的に見られる男性中心的な見方である。

それに対して intimacy は他者親密性と訳しているが、近接して親密な関係という意味で、自律的ではなく、互いの関係性の中から自分というものを作っていく。そういう考え方である。そして知性的・理性的であるよりも感情を大事にし、反省して考えるよりも、まず身体で接触を持つ。公共的であるのに比べると、私的な人間観によって生きる。この考え方は近代の西洋的な考え方によって否定されたものであり、ヨーロッパで言うと中世的、非ヨーロッパ的で日本の伝統的な人間関係はこの傾向が強く、女性的な人間観とも言える。

この考え方に基づいて、カスリスは人間観の二類型を図示している。一つは integrity で、自己統合的な人間観である。「a」は中心的な自己が確立しており、その自己が他の自己を確立した人とそれぞれ関係を持つ、つまり外側的な形で人間関係ができる。それに対してもう一つは intimacy な関係で、互いが重なり合い、接触していく関係の中に「a」という人間が置かれていくという考え方である。(図1)

図1・カスリスによる人間観の二類型

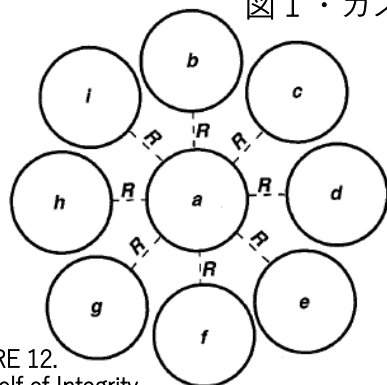


FIGURE 12.  
The Self of Integrity

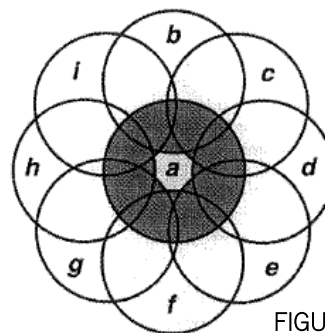


FIGURE 13.  
The Self of Intimacy

Thomas Kasulis, *Intimacy or Integrity* (2002) pp.60,61



## (2) 他者親密性の見直し

これをどう解釈するかについて、カスリスの説をさらに発展させたのがマッカーシーという女性の研究者である。カスリスは日本研究者として名高いが、マッカーシー(Erin McCarthy)はどういう方なのか、よく知らない。ただ、2010年に出された『身体化された倫理』(*Ethics Embodied*, Lexington Books)という本の副題が「*Rethinking Selfhood through Continental, Japanese, and Feminist Philosophy*」となっており、ヨーロッパ的な哲学と日本的な哲学、そしてフェミニズムの哲学を合わせて考えている。その中でマッカーシーは、カスリスの考え方を受け入れながら、intimacy=他者親密的な関係を和辻哲郎という日本の哲学者、倫理学者の説に求めている。

和辻哲郎の倫理学は、まさしく「人間」を人の間と捉えている。『人間の学としての倫理学』(岩波書店、1934)では、倫理というのは、例えば、神に命じられて行うものではなく、互いの人間関係の中で作られていくものであるとし、「間柄」に言及している。それはフェミニズムにもつながるが、特に重要なのはケアの倫理の問題にどう結び付けていくかである。



和辻哲郎 (1889–1960)  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

ケアの倫理と正義の倫理は1980年代頃に問題になった。従来の倫理は「正義だから行う」という考え方で、そういうところから、自己の正しさを自己主張していき、相互の正義がぶつかる「正義の戦争」が起こるわけである。それに対してケアの倫理を主張した人たちは、ケアとは互いの関係の中でできるもので「何が正しいか」では決まらなうと言っている。この場合の「ケア」は広い意味を持つが、具体的に育児や老人のケアと考えてもよい。その場合、「これが正しいから」と正義を振りかざしても成り立たない。「相手に応じてどう対応していくか」というところから初めて成り立っていく倫理があり得るということである。ここから、マッカーシーは哲学として、日本の「人々の間の倫理」と結び付けた考え方をしている。

### ① 他者親密性の問題点

そういう意味では日本的な考え方も評価できるが、もう一方では、状況次第でどうにでも変わってしまう、一種の状況主義になってしまう危険がある。例えば、戦後の日本の平和論を考えても、今、反省してみると、戦後の平和主義がどれだけ理論的なものを持ちえたのかは疑問である。「戦争は苦しく悲惨だから嫌だ」というのは、他者親密的な感情の論理で出発していたが、それをさらに理論的に突き詰められなかったのではないか。それが今、簡単に崩壊しそうな状況になっている。したがって、他者親密的な形が必ずしも良いとは言えない面もあるので、それは反省すべき点だと思う。

### ② 他者・死者の問題

もう一つ重要なのは、他者親密的な倫理を自己統合的な倫理に対するものとしたときに、

大きな問題が欠けているのではないかということである。それは亡くなった人の問題である。これは東日本大震災のときに大きな問題として浮上したが、それまで、死者の問題はあまり大きくならなかった。

私はこの少し前から死者の問題に取り組んでいるが、田辺元という京大の有名な哲学者は晩年に「死の哲学」を提唱している。「死者との実存共同」ということで、田辺元は妻が亡くなった後も亡くなった妻との交流を実感として持つことができたとし、それを否定できないとすると、死者は我々と切り離されても無くなってしまふものではなく、死者とも互いに関わっていかなければならないのではないかと問題提起したのである。これを親鸞による「往相」「還相」という言葉で説明すると、人間が死んで向こうの世界に行き、その死者がまたあの世から戻って来て生きている人に働きかけ、生きている人たちもまた死者に働きかけるという関係構造が成り立つのではないかと、そういう理論を提起したのである。

そう考えると、死者も含めて考えなければならないので、今までの世界観では成り立たなくなる。それを踏まえて、どういう形で新しい世界観をつくることができるのかを考えなければならない。

#### IV 新しい哲学をいかに築くか

私は2011年に『哲学の現場』（トランスビュー）という本を書いたが、その中でその問題を取り上げ、今はまた少しずつその先も発展させている状況である。

##### （1）一神教的世界観と、近代科学・哲学の世界観

一神教的世界観とは、絶対者としての神が超越的に存在し、それが世界を創り、そこで人間の世界が出来上がっていくという上下関係である。

ところが、近代になると絶対者としての神の存在が疑われるようになり、上下関係の上の部分が消えてしまった。そこに科学中心主義、あるいは、唯物論、すべて否定的に捉えるとニヒリズムのような「この世界だけがすべてである」という考え方ができてしまった。

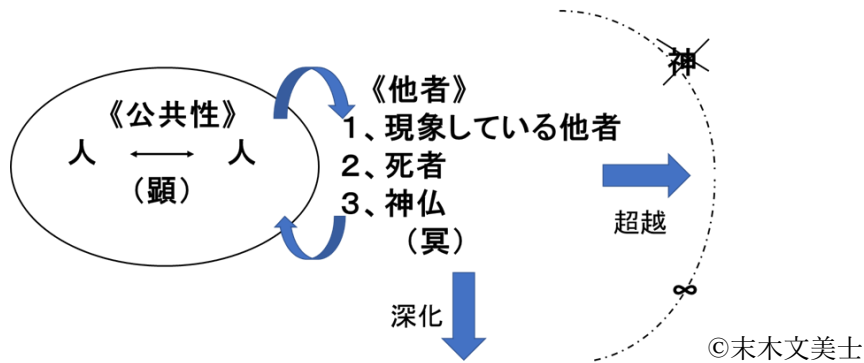
我々は、教育段階でこういう考え方に慣れてしまっているところがある。

##### （2）伝統的思想・宗教の世界観

しかし、その考え方は果たして正しいのだろうか。かつての神はもういないと言ってしまっただけなのかどうか、そう疑問を感じると、田辺元が説いた死者との実存協同も成り立つのではないかと思えてくる。

そこで、考えられる新しい世界観の構想を図式化した（図2）。「この世界だけがすべて」と思われていた人間の領域を楕円で囲んで左側に置くと、すべてがその中に入って、ここで公共的な場が成り立つ。ところが、そこでは通用しないものがある。それは他者のところに入るが、他者は互いの公共的な了解が成り立たない。

図2・伝統的思想・宗教の世界観



他者は三つの階層に分けられる。第一層は「現象している他者」である。我々は互いに話し合うが、それだけで互いを完全に理解できるということはありません。つまり、現象している人であっても、あるいは自分自身であっても、「自分は一体何者なのか」という問いに誰も答えられないし、自然の世界をすべて科学的な法則で捉え切れるかということ、例えば、地震予知の科学が進んでも御嶽山の噴火は分からなかった。科学がもっと進めば分かるかということ、精度は高くなると思うが、完全にすべてが分かり切ることはないと思う。そういう意味では、自然も他者であると言える。

第二層は「死者」である。亡くなった人との何らかの形での交流があり得る。これについては上に述べた。

さらに、第三層として「神仏」がある。例えば、神様や仏様は目に見えるものではないし、「そんなものはない」と言ってしまえばいけないことになる。例えば、「ミサのときにパンとブドウ酒がキリストの血と肉に変わるといのはナンセンスだ」と言ってしまえばそれまでである。同じように、密教の儀式や神道の儀式では神様を呼ぶが、神様が来たかどうかという客観的な証拠はどこにもない。「来るはずがない」と言ってしまえばそれまでである。しかし、そのような形で、我々は歴史の中で長らく神仏と交流を持ってきた。それは大事なことではないかという考え方である。

ここで人間の領域を「顕」、他者の領域を「冥」と表現をしているが、「顕」は表に現れたもの、「冥」は目に見えないものである。これは中世に使われていた言葉で、『愚管抄』という歴史書を書いた天台座主の慈円が使っていたものである。

他者のさらに右側の点線上に「神」と書いて×印をつけているが、この図式の中で超越的な、キリスト教的あるいは宗教的な「神」を位置づけようとする、極限の超越的なところになる。その「神」に×印をつけたのは哲学者のマリオンによるもので、「神」という言葉でさえ捉えきれないという意味で、「神」がいなくなるという意味ではない。

ユダヤ＝キリスト教的な世界観が、神と人との上下関係を軸と



慈円 1155 - 1225  
Public domain,  
via Wikimedia Commons



山越阿弥陀図  
Public domain,  
via Wikimedia Commons

するのに対して、水平的な世界観が日本の伝統的なものの見方である。例えば、「山越阿弥陀図」のように仏は天の高いところではなく、山の向こうにいたのであり、垂直的な思考に対し、水平的な形になっている。この図から分かるように、この世界の奥に他者がいるという考え方ではないかと思う。決して上に超越的な存在として存在するのではなく、この世界の奥に他者の「冥」の世界がある。その辺りが中世に展開した世界観である。

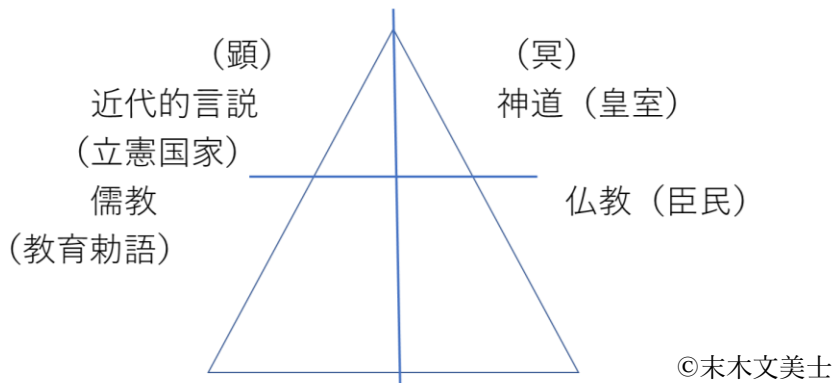
### (3) 近代「国体」の精神構造

ここで話が近代に飛ぶが、近代は道徳や近代国家が出来上がって、「顕」の領域だけで考えられがちである。明治憲法ができて、「ヨーロッパに追いつけ、追い越せ」の勢いで、新しい科学が発展し、新しい学問が発展していく「近代的言説」という部位があり、それを支えるのが明治国家においては「教育勅語」という道徳であった。つまり、儒教的なものが支える構図になっていた。

ところが、従来の政治学などの社会科学では、近代日本の国体は捉え切れない。それは、近代の日本は表に見える政治だけで成り立っていたわけではなかったからである。その裏側に、近代もまた「冥」の領域を持っていた。近代を支える裏側には神道や仏教があったのである。皇室の祖先を祀るものとして神道が位置づけられているが、これは明らかに近代的な再解釈である。それに対して、一般の臣民には仏教が位置づけられていた。

これが、近代の家父長的な社会体制に対応していく。家制度が確立され、家父長が家族の面倒をみるという体制となり、それが日本国家全体のベースをつくった。そして、近代の家を支えたのが仏教である。家のシンボルは位牌と墓であり、火事になると何を置いても位牌だけは持ち出すほど大事にされたが、その位牌は仏壇に祀られ、墓は仏教の寺に設けられた。つまり、近年は仏教が家を支配していたのである。そして、ピラミッド型の一元化した構造の頂点に天皇を置くという体制づくりが、明治の政策だった。天皇中心の「国体」はこのような構造を持っていたと考えられる (図3)。

図3・近代「国体」の精神構造



#### (4) 戦後言論の誤り

それに対して今日の問題を考えると、戦後は、戦前の家の体制が形の上で崩壊する。ところが、崩壊したにも関わらず、それに対する新しい理念は作られなかった。そこで出てきたのが、ヨーロッパの近代に由来するような現世主義、つまり「冥」の世界、裏側の世界を認めない科学万能の世界である。その中には、常に科学によって社会は進歩していくという考え方があつた。そのために、本当の意味での言動に基づく世界観が作られなかった。

したがって、戦後は保守 vs 進歩ではなく、進歩 vs 進歩、つまり進歩の仕方で対立してしまい、過去を踏まえ、それを生かして先に進むという本当の意味での保守=進歩の仕方が形成されなかったのではないかと。それが結局、いろいろな形で行き詰まりを示しているのではないかとと思われる。

#### (5) 近世再考

それに対して、今日はどういう形が可能なのか。

私は元々東京に住んでいて、京都に移り住んだが、祇園後祭を復活させようという、強靱な形で過去の世界を取り戻そうとする動きに感銘を覚えた。そのような展開を見ると、我々は明治によって否定された近世を、もう一度考えなければならないと思う。

近代は、東京にすべてが一極集中し、東京が超近代化の都市を形づくり、その中に日本の他の地域がすべて集約されていく。例えば、東北などはそのためにすべて東京に収奪され、草刈り場になってしまった。それに対して、もう一度近代に否定された近世を考え直してはどうかということである。

それは多重化型の国家であり、京都、江戸、大坂の三都を中心に、諸国が分かれてそれぞれの地域が半独立体制を持っていた。そのなかで、一極集中にならないような形の社会ができていたし、難しいけれども、統制と自由がバランスをとりながら進んでいた。思想や文化に関して、一方で世俗化が進むとともに、それに対して「冥」の世界が世俗化の行き過ぎに反撃するような力を持っていた。

そういう意味で、近代についてもう一度反省し、見えない「冥」の世界を取り戻して、新しいバランスを持った世界をつくり直していく必要があるのではないかと考えている。

|      |  |
|------|--|
| 発行日  | 2024年1月31日                                   |
| 講演著者 | 末木 文美士                                       |
| 編集発行 | 公益財団法人 国際高等研究所<br><「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクト事務局 |
| 編集協力 | アトリエ アロ 大仲佐代子                                |

ISSN 2759-0577



満月に照らされて浮かぶ「ゲエテ」の胸像  
(国際高等研究所庭園)